

麗江納西族・美姑彝族調査の総括

(1995・9・9～9・29)

郭 大烈[※]

一、概況

今度の調査は1994年9月、1995年3月に行われた麗江納西族の調査に引き続き、もう一度盛大に行い、深く掘り下げる調査である。調査の目的は前回と同じく『納西族・彝族と日本の民俗宗教の比較民俗学的考察』の課題である。

今回の団員は日本側は佐野賢治、田中通彦、小熊誠、安室知、丸山宏、飯島吉晴、松岡正子、湯川洋司、上野稔弘、志賀市子、台湾の在日留学生蘇素卿、中国の在日留学生沈雪軍。北京側は陶立璠、周星、色音、何彬、巴莫阿依、巴莫曲布嫫。雲南側は郭大烈、李子賢。麗江側は李錫、習煜華。涼山側には曲比石美、馬爾子、摩瑟磁火などがそれぞれ麗江、美姑の調査に参加した。

調査団団員は9月9日にそれぞれ上海、北京から昆明で合流する（そのうち小熊誠は翌日昆明に到着し、巴莫阿依是北京で開かれた世界婦女大会に参加するため、大会終了後、直接西昌へ向かい美姑調査の手配をする）。この日はちょうど十五夜であるため、雲南社会科学院院長何耀華の接待で晩餐会を行う（御伴するのは科学院辦公室范祖錡、外事科長左娅莎）。

9月10日～19日は麗江において民俗調査を行う。そのうち12日～16日は太安郷行政村汝寒坪、天紅、花音三つの自然村を訪れ、聞き取り調査を行う。団員は生業、宗教（東巴、桑尼）、年中行事、社会組織、人生儀礼などの五つのグループに分けられ、個別の家庭訪問を行う調査をする。17日は麗江博物館で盛大

※雲南社会科学院民族研究所所長

な東巴「汝仲畢」儀式（寿命を求める儀式）を行う。麗江県政府要員及び有識者200人あまりが出席する。18日は午前、車にて麗江を出発し午後300キロを離れた瀘沽湖辺の洛水村に到着、モソ人に関する民俗調査を行う。19日は午前11時に洛水を出発し、寧浪県へ向かい、地元政府の熱烈歓迎を受けた。

9月19日～21日は移動日にて450キロのうねり連なる大小涼山を越え、美姑県に到着。途中、涼山自治州及び塩源県政府の歓迎と招待を受けた。彝族奴隸社会博物館を参観する。

9月22日～26日は美姑県巴普鎮三河村、基偉村、巴普村、覚洛郷瓦吾村、伙姑洛郷洛角村を訪れ、彝族に関する民俗調査を行う。そのうち24日は「孜莫畢」儀礼（病魔を追い出し、鬼邪を駆除する儀礼）を行う。25日の晩、中国側学者は美姑県長沙瑪吉日との懇談会をもち、美姑県の対外開放と経済文化の発展に関する問題について意見を交換する。26日の晩、県政府の要員を招待する宴会では、中日学者は県政府に美姑県彝族畢摩文化研究所の創立の提案書を提出する。沙瑪吉日県長が速やかに研究所の成立を実現させるといふ意を表す。

9月27日は移動日にて美姑県を出発し、西昌経由、汽車にて成都へ向かい（巴莫姉妹は西昌に滞在し、李子賢は汽車にて昆明へ帰省）、28日の午前、成都に到着。四川省博物館、青羊宮、杜甫草堂を参観する。その晩、佐野、松岡、郭大烈は四川民族研究所李紹明研究員を訪ね、涼山彝族の調査について意見を交換する。29日午前、全員は四川省民族出版社を訪れ、当社の出版図書を参観し、大量の図書を購入する。午後、日本側調査団は上海を

は香港経由で帰国、中国側調査団はそれぞれ北京、昆明へ帰省する。ちなみに中央民族大学に留学中の韓国留学生、申明淑は自費参加者として民俗調査に参加した。

二、成果

今度、計両省、両県、四つの郷鎮、七つの村を訪れた。百名近い地元民族幹部と村民の協力により聞き取り調査を行い、伝承者から大量の資料を手に入れ、貴重な写真を取り、資料や文献を収集した。また麗江、美姑では六回の講座を催し、実り多い成果があげられ、期待通りの結果が見られた。中日双方の学者とも満足している。

上野稔弘は前回の納西族調査に引き続き、更に深く掘り下げる調査を行うとともに今回彝族を加えて調査することは正に比較民俗研究の始まりだと語った。

今回の調査の成果としては以下のいくつかの面についてまとめた。

1、異なる民族、地域における民俗文化と生態環境

納西族、彝族は古代からこの神秘的な地域では不滅の歴史を創造した。横断山脈に分布している数多くの集落は山間の盆地、河谷、傾斜地の畑などによりそれぞれ異なる生計方式が生まれた。調査団全員は様々な体験に従って、至る所に忘れがたい印象をもった。

日本山口大学助教授湯川洋司は「大涼山の美しい風景の印象は深く残っている。彝族が山の精霊であることは今ようやく分かった。山を大切するのは彝族文化を保存することと同じだ。日本の農村では伝統文化を保存しがたいことは地理環境に関わるかもしれない」と述べた。筑波大学助教授田中通彦は「私は1935年に生まれ、日本の最貧困の時代の生活を体験した。だから、大涼山の生活は貧しいと思わなかった。ここでは物産が豊かで、二十一世紀に向かう時、更に大きな可能性が期待できる」と述べた。天理大学助教授飯島吉

晴は「若者が自民族の伝統文化を熟知することは素晴らしいことである」と語った。鶴見大学講師松岡正子は「地元の幹部や村民から暖かい手配、熱心に協力をしてくださった。至る所で彝族の伝統的習俗により豚や羊を殺し、私たちを接待した」と語った。

2、漢族文化と少数民族文化との関連

日本側団長、佐野賢治は納西族、彝族文化と日本文化との相似性は漢文化の影響に及ばされたと述べた。かつて日本の学者が提出した照葉樹林文化圏の研究は主に生態及び文化の相似点からのが多い。従って、我々はここで二つの問題を注目しなければならない。一つは漢文化が各民族文化に影響を与えること、もう一つは漢族ではすでに失われた文化が他の少数民族に保存されている。これは比較民俗学を研究する時にしばしば表れてくるものである。

各民族の文化では自民族の独自の行き方があるが、孤立する形で進展してきたのではなく、周辺の民族文化にも影響されてきたのである。

3、納西族における東巴、桑尼と彝族における畢摩、蘇尼との比較研究

納西族の東巴と彝族の畢摩両方とも原始宗教の祭司であり、自民族の伝統文化の後継者でもある。だが、両文化を保つ後継者については中央民族大学教授陶立璠が「東巴の後継者がほとんどいない状態となるが、畢摩の場合はれっきとした後継ぎがある。両者の後継者問題には大きなギャップがある」と述べた。美姑県は1992年5月から1993年10月の間に全面調査した結果、県内の畢摩の数は1731人で、一つの郷では57人、一つの村では7.2人、一つの住民組では1.2人の割合であり、農村総人口の0.12%を占め、男性人口の0.2%を占めている。そのうち、35才以下のは650人、37.0%を占め、36才～55才に707人、40.0%を占め、56才以上のは374人、23.0%を占めている。現在、農村にはまた3才、4才から畢摩を修業して

いる子供がいるが、平均的に15才前後の畢摩が多い。ところが、経典を熟読できる人はわずか39人しかない、2.3%を占め、所々読める人は265人、15.8%を占めている。残った者はほんのわずかしか読めない。自治州人民委员会主任曲比石美及び県民族言語委员会主任嘎哈石者、中央民族大学副教授巴莫阿依はそれぞれ畢摩の現状、歴史、文化の特徴について紹介した。東北大学助教授丸山宏、筑波大学志賀市子は「畢摩、蘇尼の鬼神観念は非常に豊かで、研究する値打ちがある」を語った。

4、納西族の東巴儀式と彝族の畢摩儀式との比較研究

両民族における人生儀礼など数多くの儀式に基づき、地元の東巴と畢摩を頼み、「汝仲畢」（寿命を求める）と「汝莫畢」の儀礼（病魔を追い出し、鬼邪を駆除する）を行う過程を見せてもらった。儀式では両者ともケガレを取り除き、犠牲（家畜）を捧げるなどの類似点があった。ところが、東巴儀式を行う時、色彩の鮮やかな神像や紙人形、紙馬などの実物を使い、神鼓、鑼、鈴の音の勢いがよい、それに対して畢摩儀式の場合は白黒の「神枝」を使うだけ、抽象的なものが多い。北京大学教授周星が前者にはもっと人を引き付け、見る価値があると語った。

5、涼山の家支制度、頭人（徳古）制度と他の民族との比較研究

家支（次尾）制度は涼山の彝族社会を理解するための鍵である。馬爾子副研究員が次のことわざを紹介した。俗に「鷄蛋一般大，黒彝一樣大」と称する。涼山地域には家支の数はおよそ500戸強がある。家支は彝族の人々にとって保護傘のような存在であれば、人々をコントロールする無形な網でもある。家支は社会の安定を維持する要素であれば、社会を閉鎖する根本的な要素でもある。田中通彦は「彝族社会の構造は特色があり、ここでは人類社会と自然環境と強く結びついた典型的なモデルが見られる。17世紀初期には満族が各

部落をまとめ、統一し、最後に清朝を樹立した。それに対して彝族社会は家支制度があるため、人々をまとめない、ついに歴史上には統一政権が現れなかった。これは家支制度により阻害を受けたのであり、内的な要因と言える」と指摘した。納西族の場合は元朝の初期に中央王朝の力により各藩をまとめ、土司領土社会制度に転換し、清朝の初期に至り、「改土帰流」を執行し、社会の閉鎖状況がようやく解放された。

沖縄国際大学教授小熊誠は「彝族の頭人制度とアフリカの民族との比較研究をしたら、学術的な価値がある」と語った。

6、両民族における文化変遷の比較研究

45年来、両民族の地域では確かに著しい変化が起こった。例えば、汝寒坪に住む納西族の若者はかつて婚姻に対する決定権がなかったため、殉情する現象が盛んに行われた。ところが、現在盛んになっているのは「駆け落ち」である。洛水に住むモソ人は依然として通い婚の生活を送り続けて、その数は、90%以上を占める。昔と違っているのは「阿夏」（恋人）相手が固定化する傾向である。それと同時に葬式はますます盛大に行われている。モソ人は秀麗な瀘沽湖風景と独特なモソの習俗を活用し、観光事業を開発し始めた。1994年10月21日に、その地方ではおよそ15戸の家庭式旅館が営業し始め、約300人強の客が泊まれる。洛水の下村に住む32戸の半分弱は旅館を経営している。旅館の経営とともにボート、馬乗り、かがり火の集いなどのサービスも提供している。調査団は「摩梭園」という旅館に泊まった。この旅館の経営者は曹学文といい、元寧浪県観光局の局長を勤めたが、1994年に政府から10万元を貸付され、故郷へ帰り、観光事業を始め、有名人となった。彼は現在、雲南大学にて観光事業について勉学中。「摩梭園」の業務をしばらく自分の姪、茨拉差に委託している。茨拉差は家族全員15人で5人兄弟がいる。兄は車の運転で、弟は夜のかがり火の集いを

それぞれ仕事の役割分担にしている。また、茨迪という54才の親戚がイギリスに移住し、最近親族に会うため帰省した。

涼山彝族地域社会は比較的安定である。

7、中国側学者は自分の研究テーマについて調査を行った

陶立璠の「風水」、李子賢の「民間文学」、周星の「民俗医薬」、巴莫曲布嬢の「鬼神観念」、郭大烈の「文化変遷」についての調査はそれぞれ成果があげられた。

8、美姑彝族畢摩文化研究所の創立に関する提案

畢摩文化は世界の宗教文化において独自性がある。畢摩は今も彝族の山々で頻りに儀式を行い、活躍しつつある。美姑県は大涼山の中心部にあり、97%以上の人口は彝族である。ここでは彝族の伝統文化が十分に保存されている。畢摩は人々の生活と強く結びついたため、畢摩の数はかなり多い。登録した畢摩の人数は1700人だが、修業中の青少年畢摩も含めたら、6000人に上る。美姑県政府は彝族の伝統文化の保存を極めて重視し、県文化館の文物陳列室には数多くの文物が陳列されている。県言語委員会には300冊（およそ彝文文献の600冊の半分の数）の経書が収集され、一年間半をかけ、県内の畢摩について全面調査し、登録した。他には、県言語委員会では現在7人の専任関係者が属している。彝族に関する著書では羅家修『古今彝歴考』（四川民族出版社、1993年出版）、現役の自治州人民委員会主任兼民族研究所所長曲比石美などの著書がある。ちなみに曲比石美著『尼木概論』は1995年12月現在、印刷中である。従って、美姑県にて畢摩文化を研究することはよい条件が備えられている。畢摩文化を調査、記録、保護、研究するのは学者だけの責任ではなく、県政府の関係者も努力すべきことと我々は考えている。それゆえ、美姑彝族畢摩文化研究所の創立を提案した。美姑県政府は研究所の創立について全力を尽くし、長期に渡り国内

外の学者に協力し、世界の文化研究に貴重な資料を提供するという意を表した。

9、民族地域の経済発展に関心を持つとともに生態文化を保護し、民族文化を発展させる

民族地域の経済を発展させることは時代の勢いである。これは民族地域に生活している幹部や人々の望みである。ところが、国内外における経済の発展に伴う様々な教訓から分かるように、経済を発展させるとともに自民族の文化も大事に保存しなければならないのである。調査団はこの点について両地方の指導者に具体的な意見を述べた。

10、中日双方の長期的文化交流の目的

佐野賢治は「日本では毎年およそ1200万人の観光客が出国する。もし納西族と彝族文化や習俗などを宣伝し、1%だけの観光客を引き寄せても、文化交流にとって成功すると言える。それと同時に納西族、彝族の文化を日本に紹介する」と語った。

三、まとめ

今回、調査の成功することについてくつかの点をまとめた。

1、緻密な計画と苦心の構成

中日双方の団長及び秘書長、総務の間で協力し合って、調査は計画通りを行った。期待通りの成果があげられた。

2、調査団全員の努力

今度の調査は長期間で、交通状況も厳しいため、道中一部の団員の体調が崩れてしまい、特に佐野団長が注射を受けたり、入院したりすることもあったが、それにもかかわらず、昼間は調査へ出かけ、夜は講座に参加した。調査団全員の努力で無事に調査を実施できた。

3、地方幹部と人々の協力

雲南社会科学院院長何耀華を始め、麗江地方委員会書記楊国清、秘書長陳嘉耀、行署秘書長唐之魯、麗江県県長和自興、副県長和紹興、副書記何金平、沙文明、政協主席王兆祺、副

主席李徳祥，元人大主任楊家玉などの方々
 調査団を訪ね或いは一部の活動に参加した。
 また，県文化局長黄乃鎮，民間合作総社長和
 笑春，太安郷の幹部からお世話になり，麗江
 での調査活動はスムーズに行った。涼山へ移
 動する途中，寧浪県委員会書記加覚阿三，副
 県長何学成は小涼山賓館で調査団を招待した。
 他には涼山州副書記駱云祥，人大副主任吳陰
 徳，副州長張作哈，政協副主席巴莫爾哈，州
 政府副秘書長木桂，美姑県県長沙瑪吉日，副
 県長劉呷娜，吉都吉幾，人大副主席陳海英，
 西昌市外辦主任劉玉蘭などの方々の協力と熱
 烈な招待を受けた。また，至る所に村民から
 友好の意を受けた。地元の生活は厳しいのに
 「客人来了要見血」（客が来たたら家畜を殺さな
 ければならない）という伝統的な習俗により，
 我々にもてなしをし，聞き取り調査の相手な
 ってくれた。調査団の全員とも大満足した。

4， 実地調査の対象地

麗江太安郷汝寒坪，天紅などの村は典型的

で，伝統文化がよく保存されている。美姑県
 は大涼山の中心部にあり，1943年に有名な民
 族学者林耀華はかつてここで実地調査をした。
 50年代初期，四川省民族調査組も実地調査を
 行い，参考に供する資料を得た。

5， 通訳者と研究協力者

通訳者は前回に参加した沈雪軍の他には，
 今回何彬と色音，蘇素卿を加えた。そのうち
 何彬と色音は博士号をもつ民俗学専門の学者
 にもかかわらず，通訳者として積極的な協力
 をした。また，麗江側の協力者：習煜華，李錫，
 楊志堅，木庚錫，和石生，美姑側の協力者：
 曲比石美，馬爾子，摩瑟磁火，阿嘎石者，洋仁，
 達副など多数の方々は彼らが自民族の文化を
 熟知し，積極的な協力により今回の調査に大
 変貢献した。

最後に巴莫姉妹の家族が調査団に至れり尽
 くせりのもてなしをし，緻密な手配をしてく
 ださったことをここに感謝する次第である。

(翻訳者 蘇 素卿)



東巴による「汝仲畢」儀式の行列に参加
 1995/9/17 於 雲南省麗江



ビモによる「ツモビ」儀礼での調査団員
 1995/9/24 於 四川省美姑県